

# すべての子どもが育ち合う 園での「インクルーシブ教育」

「指示がよく理解できない」「衝動的な行動が多い」といった気になる子どもが増えていると指摘する保育者は少なくありません。脳機能の発達の偏りによって、生活上のさまざまな困難をきたす「発達障害」がある子どもへの対応が課題となる中、障害の有無にかかわらず、すべての子どもがともに生活しながら、個に応じた適切な指導・支援を受けられる園での「インクルーシブ教育」が注目を集めています。

## インタビュー

### 保育者の工夫、配慮によって ともに認め合う園をつくる

発達障害がある子どもと障害のない子どもがともに育つ園をつくるために、これからの保育者にはどのような技術、配慮が求められるのでしょうか。「インクルーシブ教育」の考え方を発達障害の研究と療育の専門家である榊原洋一先生にうかがいました。

#### 発達障害がある子と周囲との 摩擦を解消する配慮が大切

「発達障害」とは、生まれつきの認知や行動の特徴によって、対人関係やコミュニケーション、行動や感情のコントロール、学業などに大きな困難を伴う状態です。障害は大きく次の3つに分類できます。①行動面において不注意や多動性、衝動性などで生活困難がある「注意欠陥多動性障害(ADHD)」、②読む、書く、計算するなどの学習上の困難がある「学習障害(LD)」、③コミュニケーションが苦手に対人関係を築くことが不得意、こだわりの強さで生活に困難のある「自閉症スペクトラム(ASD)」、です。

2012年に行われた文部科学省

の調査では、全国の公立小中学校の通常学級に在籍する児童生徒のうち、知的発達に遅れはないものの学習面または行動面で著しい困難を示す子どもが6.5%に上ることがわかっています。つまり、30人子どもがいれば、2人程度は発達障害によって学習や生活面での困難を抱えているということになります。ADHDは小児期の精神疾患でもっとも多く、アメリカでは子どもの7%にADHDの傾向があると言われています。

発達障害の原因は、脳機能の発達の偏りにありますが、生まれつきの行動や思考の特性であり、「病気」というよりも個性や性格に近いものだと考えたほうがよいでしょう。保護者の育て方や生育環境で現れるものでもありません。



お茶の水女子大学副学長  
ベネッセ教育総合研究所顧問、  
チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長

#### 榊原洋一

さかきはら・よういち

専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。主な著書「アスペルガー症候群と学習障害」(講談社+α新書)、「発達障害のある子のサポートブック」(学研)など。



ただ、特に ADHD や LD では知的な遅れを伴わないことも多いため、周囲が本人の困難さを理解しにくい面があります。そのため、問題が起きたのは本人の努力が足りないのだと誤解されやすく、本人も劣等感をもちやすい傾向にあります。例えば、ADHD は、「集中力がない」といった症状がありますが、発達障害の原因と症状に対する理解がなければ、「自分勝手な落ち着きのない子」と毎回注意されてしまい、本人はやる気を失いかねません。問題となる行動を減らすには、注意するだけではなく、「なるべく最前列の中央に座らせる」といった周囲の支援が重要です。

園や学校においては、発達障害を「治す」のではなく、障害を「違い」と捉え、生活や学習の場面ごとに子どもにあった支援を見つけ出し、本人と周囲の摩擦を解消する手助けをする必要があるのです。

## 多様な人とともに生きる教育を園で実践する

障害の状態に応じた指導や支援が必要な子どもが園や学校で増える中で、一人ひとりのニーズに合った特別支援教育の充実と、障害のある子どもと障害のない子どもが可能な限りともに育ち、学ぶ「インクルーシブ（「包括的」の意）教育」の仕組みづくりが求められています。インクルーシブ教育は、2006年に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」において初めて提唱された考え方で、障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場でともに学びながら、個別のニーズ



のある幼児や児童、生徒に対しては、自立と社会参加を見据えて、そのニーズに的確に応えていくものです。

現在、発達障害のある子どもへの対応、支援が重要な課題となっていますが、インクルーシブ教育を実現するためには、障害によって生じる子どもと周囲との摩擦を取り除くための便宜（合理的配慮）を行う必要があります。教室での机の配置や教具などを発達障害のある子どもたちのニーズに合ったものに換えたり、支援員を加配したりといったことがこれに当たります。

インクルーシブ教育が目指すのは、人格と個性を尊重し、支え合い、多様なあり方を認め合う共生社会です。園や学校で、障害のある子どもと障害のない子どもがふれあい、交流していくことはとても重要な経験になります。インクルーシブ教育を実践する学校を見に行くと、「○○ちゃんは話さないんだよ」「○○ちゃんはときどきキャーッと叫ぶんだ」など子どもは先入観なくありのままに相手を受け入れ、学校生活をともにしています。ときには私に対してまわりにいる子が「○○ちゃんはこのことを言っているんだよ」と教えてくれることもあります。多様な人々がいる社会での生き方を障害

のない子どもも学んでいるのです。

とはいえ、障害のある子どもとない子どもがただ同じ時間、場所を過ごせばよいというわけではありません。園であれば、集団の中の一人ひとりに対して最大限の注意を払い、適切な支援を行う保育者の高い技術があって初めてできるものです。

そもそもインクルーシブ教育は、発達障害があるかどうかにかかわらず、すべての子どもを支えるものだと私は考えています。視力が弱い子はメガネをかけたり、前に座ったりしますし、聴力が弱い子は補聴器をつけたり、あるいは背の低い子どもが手の届く場所にものを置いたりして、それぞれの子どもにとって生きやすい環境を、実は既にそれぞれの園ではつくりようとしているはずです。一人ひとりの子どもに目を向けることで、結果としてすべての子どもがよりよく遊び、育つ園をつくることができます。

今、私たちは、障害の有無、肌の色、宗教や価値観などに左右されず、すべての人は等しく大切であるという社会を目指しています。インクルーシブ教育は、現代の人間学そのものであり、子どもどうしの遊びの中で豊かに学び、育つ園だからこそ、実践すべきものだと考えます。

# 寛容性を高めた保育の中で、 保育者が子どもとともに豊かな成長を果たす

発達障害がある子どもと向き合うとき、保育者が心がけるべきことは何か、インクルーシブ教育を園全体で進めるときにどのような配慮が必要なのか、保育と療育のふたつの現場で経験を積み重ねてきた藤原里美先生にうかがいます。

## 折り合いを見つけることで 子どもの困難が軽減する

保育者にとって、発達障害のある子どもと向き合う際に大切なことは、一人ひとりの子どもの「ものさし」をわかってあげることです。保育者の尺度と発達障害のある子どもの尺度は大きく違います。もちろ



東京都立小児総合医療センター  
チャイルドフード・ラボ所長

### 藤原里美

ふじわら・さとみ

公立保育園勤務を経て同センター主任技術員に。臨床発達心理士、自閉症スペクトラム支援士。療育に携わりながら、保育者研修を通じた早期発達支援士の育成にも力を入れている。

ん、子どもによってもさまざまです。その子のものさしを理解して、社会の中で生きていくための折り合いを子どもと見つけていくことが大切です。

例えば、自閉症で触覚過敏のAちゃんは「シャワーが痛い。針が刺さるみたい！」と泣いてしまいます。保育者が自分のものさしだけでAちゃんに接したなら「気にしすぎだよ」「がまんしなさい！」と怒ってしまうかもしれません。でも、Aちゃんのものさしを受け入れれば、「おけに水を入れてからだにかけると痛くないよね？」と解決策を提案することができ、運動のあとにからだを清潔にするという目的が達成できます。子どものものさしと保育者のものさしの折り合いが見つけられたのです。

また、「一番じゃなくちゃいやだ」とこだわるBちゃんは、椅子を振り上げて「頭が痛くなるくらい悔しい！」と怒りを爆発させることがあります。「そうだよ、悔しいよね」とBちゃんの気持ちを受け入れ、落ち着いてきたところで、「7人のグループのうち、ゲームで1番になれるのは何回に一度かな」と聞きました。「7回に1回」と答えるBちゃ

んに「残りの6回は怒ってばかりなのはいやだね。じゃあ何番までならがまんできそう？」と尋ねると、Bちゃんはしばらく考えてから「3番まで」と言いました。Bちゃんと保育者のものさしの折り合いがついた感動的な瞬間でした。それから、Bちゃんと3番の次には4番という様にスモールステップでがまんする練習を重ね、最後は7番までがまんできるようになりました。

こういう体験を通して思うことは、子どもたちの「困った行動」は、その子に近づききっかけなのだということです。そして、子どもへの理解が進み、折り合いがつけられるようになると、子どもも保育者も生活が一気に楽になります。自分の知らない世界を子どもに教えてもらうような感覚になるはずです。

## 子どもが抱えている困難を 知識と感覚で理解する

発達障害のある子どもの行動の理由を科学的に理解することも重要です。保育者からすると「困った行動」にも、脳の機能特性からほとんどすべて説明が可能です。その子の行動の土台にある脳の特性をきちんと理解したうえで支援を考えるのです。

自閉症スペクトラムの子どもは、不安が募ると多動になる傾向があります。それを理解しておき、「この子の多動の背景には何があるのだろうか」と仮説を立てる段階に移ります。園での生活で、次に何をすればよいかという見通しがもてないために不安な場合と、親子関係で問題があるために不安な場合とでは、支援の仕方も違ってきます。

子どもの直面している困難がどのようなものかをリアルに理解することも大切です。私は園での研修で、保育者にスキー用の手袋をつけて折り紙をつくってもらうことがあります。上手に折れずに苦勞する保育者に、「もしも『どうしてできないの!』『なんでそんなに遅いの!』と言われたらどんな気持ちになるでしょうか。運動面での発達に障害がある子どもは、そんな気持ちを味わっているんですよ」と説明し、子どもが抱えている困難を理解してもらっています。そうして子どものことが理解できれば、保育者の声かけも「先生手伝おうか?」「ここ、上手に折れているね!」と変わってきます。多くの保育者が、「自分が変わったら、子どもたちが変わった」と研修後の変化を話してくれます。

### まず園の得意な領域から見直してみる

発達障害のある子と障害のない子が共生できる園をどのようにつくっていくか。中核となる保育者が発達障害について勉強し、それを園内研修などで伝えていくことはとても重要です。

そして、園のあり方について、私

は自園の長所、得意なところを最初の切り口に検証していくことをおすすめします。例えば、元気のよい挨拶が自慢の園であれば、「声の大きさ」という観点で検討してみても良いでしょう。「気持ちのよい挨拶は大切。でも大きな声で興奮しやすい子もいるから、その子には近づいて、声のトーンを落として話してみてもどうでしょう」など、具体的に保育が変わるきっかけが見つかるかもしれません。運動、遊びの環境づくり、絵本など何でもかまいません。その園の長所を生かす視点で「これならできそうだ」という工夫や支援につなげます。このとき、それまでに培った専門知識が役立ちます。

また、1日の保育計画を立てるとき、「この活動のときはこういうことが起こりそうだ」と予測し、準備をしておくことも大切です。母集団の活動をメインに据えながら、配慮

が必要な子どもへのフォローをサブの活動と位置づけ、その時間に手の空いた保育者にあらかじめサポートを頼んでおきます。もちろんすべての活動でそうした2本立てのプログラムをつくることは難しいでしょうが、ここだけというポイントで他の保育者の手を借りたり、サブの活動について事前にアドバイスをもらったり、あるいはサブのプログラムが実際にどのように機能したかを園内で共有したりすることで、多様な子どもたちへの保育の質が向上するでしょう。

インクルーシブ教育では、保育者自身が多様性に対して寛容であることが欠かせません。特別な配慮が必要な子どもへの向き合い方が変わるというだけではなく、保育の質そのものが転換するかもしれない…そんな前向きな気持ちで臨んでいただけるとうれしいです。

